

持続可能な

公共交通ネットワーク

の再構築に向けて

Part2

■北斗市への思い

本年3月に策定した「北斗市地域公共交通計画」は、まちづくりと一体となった持続可能な地域公共交通ネットワークの再構築を目的として、北斗市地域公共交通活性化協議会での議論を経て策定したものです。

今月号では、協議会の会長である齋藤征人氏（北海道教育大学函館校准教授）からいただいた北斗市の公共交通に関する市民のみなさまへのメッセージを紹介します。



▲北海道枝幸町生まれ。6歳から旧上磯町で育つ。障がい者支援施設の支援員などを経て2014年から現職。専門は社会福祉。46歳。

北斗市は函館市に隣接するため、よく「函館のベッドタウン」と称されますが、上磯にも大野にも、それぞれ固有の歴史とそれに連なる特長があると思います。

上磯で小中学校時代を過ごしましたが、よく家族で自転車に乗って大野川に行き、川遊びをしたり、中学校の吹奏楽部のみなどで八郎沼公園へレクリエーションに行ったりしたことが思い出されます。豊かな自然に囲まれながら暮らしていくには便利なコンパクトシティ。日々にはゆとりが感じられるまちと言えるのではないのでしょうか。

幼少期に自分を育ててくれた二つのまちが、やがて北斗市になり、今は地域公共交通活性化協議会を任されていることに、大変深い縁を感じていますし、今も両親が暮らす北斗市の地域課題は、私にとってまさに「他人事」ではありません。

■公共交通への関わり方

「市民協働のまちづくり」のためには、市民と行政がワンチームになって、我がまちをどうすべきか「作戦会議」をもつような気運の醸成が必要だと感じています。行政が市民に何をしてくれるかだけでなく、このまちのために市民には何ができるかを考え、互いに分かち合うこと。決して無理な長で考えることだと思います。

公共交通を維持していくためには、これまで以上に利用する努力・活用する工夫をみんなで考え、行動しなければいけないと、他自治体の事例からも感じています。

まずは「自分でできることで誰かのためにもなれるまちづくり」から、始めてみてはいかがでしょうか。

例えば、列車やバス、タクシーなどいつもとは違う車窓から見える景色は、ちょっとした旅行気分にもなり、わずかな時間ですが「非日常」のようなものを味わうことができますし、時間に追われる気忙しさから解放される感覚を覚えます。そして、地域の貴重な公共交通の維持にも役に立つ。一石二鳥ですよ。

駅・バス停の清掃や雪かきなどの維持管理は、施設に身近な地域住民の日常生活の中で行われていくことが理想だと思います。バス待合所に捨てられた空き缶を市の職員が回収しているようでは、持続可能な公共交通とは言いえないでしょう。

自然体であくまで無理せず、楽しみながら地域課題を解決していくことが、取り組みを長続きさせる秘訣なのです。

■公共交通について考える

北斗市には複数の交通モードがあり、他の地域と比べて「恵まれている」と思われがちですが、それを活かし切れていない側面もあるのではないかと思います。そのため、既存の交通モードを使いやすくする「接続」と「縁結び」をテーマに、議論を重ねてきます。

交通の問題は「青天井」です。例えば、バスが走っていない地域を1日1本バスが走るようになると、やがて「1日1本しかない」という声が出るでしょう。1日2本走るようになると、「せめて、午前2本・午後2本」というようになると。やがて「やはり、1時間に1本は…」となり、いずれはそれでも満足できなくなってしまう。限りなく自家用車に近付けたくなってしまうが、公共交通には限界があります。

公共交通を考えることは、私たちの暮らしをもう一度考えてみることもかもしれません。

※広報ほくと9月号では、10月からスタートする巡回ワゴンの運行計画についてお知らせします。

問 市役所企画課企画係

「内線235」